



若年女性における感謝の感情とwell-beingとの関係 について—ソーシャルサポートおよびsense of coherenceを介する可能性の検討—

藤谷, 倫子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-09-25

(Date of Publication)

2025-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7262号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007262>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏名	藤谷 倫子
専攻	人間発達
指導教員氏名	中村 晴信

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

若年女性における感謝の感情とwell-beingとの関係について
ーソーシャルサポートおよびsense of coherenceを介する可能性の検討ー

論文要旨

本研究では近年、well-beingや精神的健康との関係について注目されている感謝の感情を研究課題の中心におき、感謝の感情とwell-beingの関係およびその関係に介在すると考えられる知覚されたソーシャルサポートおよびsense of coherenceの関わりについて検討した。また、感謝の感情に関連すると考えられる要因についても検討した。

第1章は本研究の背景および目的である。日本は生活習慣病が死因の上位を占める疾病構造となり、0歳時平均余命も男女ともに80歳を越え、長期間の生存が可能になったこと、その結果、疾病予防に加え高い生活の質を保持することで人生を良好な状態で送ること、即ち、well-beingの向上が重要であることを述べた。特に現代社会がストレス社会であり、若年女性がストレスを感じている実態に加えて、ストレスが心身の健康に影響しやすいことから精神的健康やwell-beingを損ないやすい状況であり、精神的健康やwell-beingの向上を図ることが求められることを述べた。感謝の感情は人々が日常生活において感じられる感情であるが、これまでの研究報告から、well-beingや精神的健康に関する指標と関連があることが示され、また、well-being、知覚されたソーシャルサポート、sense of coherenceとも関連があるとする報告が示された。以上より、感謝の感情、well-being、知覚されたソーシャルサポート、sense of coherenceが関連している可能性が示唆された。これらを受けて、感謝の感情とwell-beingとの関係に、知覚されたソーシャルサポートやsense of coherenceが介在するかどうか明らかにすることを本研究の目的とし、並びにその目的に付随して感謝の感情に関する基礎的検討および知覚されたソーシャルサポートの内容やリソースに着目して検討を加えることとし、本論文の構成について述べた。

第2章では、男子大学生および女子大学生を対象として、感謝の感情の高さに関連する要因について、自尊感情、パーソナリティ、emotional intelligence、社会的スキルといった自己の内的要因、養育態度やアタッチメントといった家庭の養育に関する要因、知覚されたストレスや生活習慣との関係を検討した。感謝の感情と生活習慣との間に有意な関係はほとんど示されなかった。一方、自己の内的要因については、男女とも感謝の感情と自尊感情、社会的スキル、パーソナリティの外向性および協調性、emotional intelligenceの他者の情動の評価および情

動の利用と正の相関があった。女性では感謝の感情と自己の情動の評価、情動の調節との間に正の相関があった。家庭の養育に関する要因では、男女ともに感謝の感情と母親および父親の養護得点の高さとの間に正の相関があり、拒絶型のアタッチメントとの間に負の相関があった。これらの結果から、感謝の感情は、自己の内的要因および養育に関する要因の両方が関係することが示され、またこのことは従来の研究結果と一致していることが確認できた。また、第2章の結果では、知覚されたストレスにおいて男女間の差異が顕著であり、感謝の感情との関係も男性より多くの項目で有意な相関がみられ、女性がよりストレスを感じていることが示され、感謝の感情とも関係がある事が示された。

第3章では、女子大学生を対象として、知覚されたソーシャルサポートと感謝の感情ならびにsense of coherenceの関連について横断研究によって明らかにすることを目的とした。その結果、情緒的サポートについては家族から、友人から、および知人からの間で有意差がみられ、友人からの情緒的サポートは、家族からのサポートや知人からのサポートよりも有意に高かった。手段的サポートについても情緒的サポートと同様に家族から、友人から、および知人からの間で有意差がみられ、家族からの手段的サポートは、友人から手段的サポートや知人からの手段的サポートよりも有意に高かった。また、知人からの情緒的サポートや手段的サポートは、家族や友人からのサポートよりも低かった。次に、感謝の感情は知人からの手段的サポートを除き、すべての知覚されたソーシャルサポートと正の関係があった。一方、sense of coherenceは、家族からの情緒的サポート、家族からの手段的サポート、および知人からの情緒的サポートとの間で正の関係がみられた。これらを受けて、感謝の感情あるいはsense of coherenceとソーシャルサポートとの間で重回帰分析を行った結果、家族からの情緒的サポートおよび知人からの情緒的サポートが感謝の感情と正の関係があり、家族からの情緒的サポートがsense of coherenceと正の関係があった。これらの結果から、家族からの情緒的サポートのみが感謝の感情とsense of coherenceの両方に関係があることが示された。

第4章では、女子大学生を対象として感謝の感情とwell-beingの間に知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceがどのように介在しているのかについて明らかにすることを目的として検討した。感謝の感情は、家族からの情緒的サポートと手段的サポートと正の関係があった。一方、sense of coherenceは家族からの情緒的サポートのみ正の関係があった。また、sense of coherenceは、well-beingの指標であるポジティブ情動、ネガティブ情動、主観的幸福感、人生満足度のいずれとも正の関係があった。また、パス図を用いて、感謝の感情とwell-beingの間に、知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceが介在するモデルを作成し、その適合度を検討したところ、良好な結果が得られた。これらの結果から、感謝の感情とwell-beingの間には、家族からの情緒的ソーシャルサポートおよびsense of coherenceが介在していることが示された。

第5章では、第4章で構築した感謝の感情とwell-beingの間に知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceが介在するモデルについて、男子大学生および女子大学生の双方を対象として検証した。その結果、女性においては、家族からの情緒的サポートおよび家族からの手段的サポートとsense of coherenceとの間に有意な関係がみられず、他の関係はすべて有意な関係であったことから、第4章のモデルでは、女性における感謝の感情からwell-beingに至る経路は確認できなかった。一方、男性においては、家族からの手段的サポートとsense of coherence

(氏名 藤谷 倫子 , No.3)

の間、およびsense of coherenceとポジティブ情動との間に有意な関係がみられず、他の関係はすべて有意な関係であったことから、感謝の感情からwell-beingに経路は確認できたものの、第4章のモデルとは異なる部分もみられた。これらの結果は、第4章のモデルの改訂が必要であること示すものであった。従って、第4章のパス図を改訂し、感謝の感情とwell-beingとの間にパスを設け、知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceを介在させるとともに、well-beingを潜在変数とする新しいパス図を作成した。このパス図では、女性では感謝の感情が家族からの情緒的ソーシャルサポートとsense of coherenceを介在するパスと、感謝の感情からwell-beingのパスおよび家族からの情緒的サポートからsense of coherenceへのパスがともに有意であった。一方、男性では感謝の感情とwell-beingのパスおよび家族からの情緒的サポートからsense of coherenceへのパスが有意であり、感謝の感情とsense of coherenceとの間や、家族からの情緒的サポートとwell-beingとの間のパスは有意ではなかった。その結果、感謝の感情から家族からの情緒的サポートを介し、さらにsense of coherenceを介してwell-beingに結びつきパスが示され、第4章で提示したパス図と同じパスとなった。これらの結果から、この新しいパス図においても男女間のパスの違いはみられたが、いずれの性別でも感謝の感情からwell-beingに至る有意なパスを示すことができ、また適合度も第4章で提示されたモデルよりも高値であったため、改訂したパス図がより適切なパス図であることが示された。

以上の結果から、感謝の感情は自己の内的な要因や養育に関する要因、知覚されたストレスと関連すること、感謝の感情とwell-beingの間には知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceが介在することが示された。

(注) 3,000～6,000字 (1,000～2,000語) でまとめること。

論文審査の結果の要旨

氏 名	藤谷 倫子		
論文題目	若年女性における感謝の感情とwell-beingとの関係について ーソーシャルサポートおよびsense of coherenceを介する可能性の検討ー		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	中村 晴信
	副 査	教授	近藤 徳彦
	副 査	准教授	村山 留美子
	副 査	准教授	古谷 真樹
	副 査	京都女子大学 発達教育学部 准教授	間瀬 知紀
要 旨			
本論文では、若年女性における感謝の感情とwell-beingとの関係について知覚されたソーシャルサポートやsense of coherenceが介するかどうかを明らかにすることを目的としている。本論文は全6章で構成されている。 第1章は本研究の背景および目的である。現代社会における健康問題として、超高齢社会であること、生活習慣病が死因の上位を占める疾病構造であること、ストレス社会であることから、疾病予防に加え精神的健康を保持することにより、生涯を通じてwell-beingを向上させることが重要であることが述べられた。本論文では、well-beingを向上させることが期待できる要因として感謝の感情に着目し、感謝の感情がwell-beingを向上させる際に知覚されたソーシャルサポートやsense of coherenceが介する可能性について検討することが目的であることが示された。 第2章では、男子大学生および女子大学生を対象として、感謝の感情の高さに関連する要因について、自己の内的要因、家庭の養育に関する要因、知覚されたストレスや生活習慣との関係を検討した。その結果、感謝の感情は自己の内的要因および養育に関する要因の両方が関係することが示され、先行研究結果と一致していることが確認された。また、知覚されたストレスにおいて男女間の差異が顕著であったことより、女性がよりストレスを感じていることが示され、また、感謝の感情とも関係がある事も示された。			

第3章では、女子大学生を対象として、知覚されたソーシャルサポートと感謝の感情ならびにsense of coherenceとの関連について明らかにすることを目的とした。その結果、感謝の感情はsense of coherenceと比べてより多くの内容やリソースの知覚されたソーシャルサポートと関連していた。また、知覚されたソーシャルサポートの中でも、家族からの情緒的サポートのみが感謝の感情とsense of coherenceの両方に関係があることが示された。

第4章では、女子大学生を対象として感謝の感情とwell-beingとの間に知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceがどのように介在しているのかについて明らかにすることを目的とした。その結果、感謝の感情から、家族からの情緒的ソーシャルサポートおよびsense of coherenceを順に介してwell-beingに至るモデルが提唱された。

第5章では、第4章で構築したモデルについて、第4章とは異なる男女大学生を対象にしてモデルの当てはまりについて検証した。その結果、若干モデルの改訂が必要であることが示されたため、感謝の感情から家族からの情緒的ソーシャルサポートあるいはsense of coherenceを介してwell-beingに至るようにモデルの改訂を行い、女性に加えて男性においても当てはまりが良く、より汎用性のあるモデルを得ることができた。また、感謝の感情とwell-beingとの間に知覚されたソーシャルサポートとsense of coherenceが介在することが改めて示された。

第6章は本論文の総括を行った。

本論文は、現代社会の健康問題を踏まえ、若年女性を対象とし、感謝の感情に着目してwell-beingに至る経路とそれに影響を及ぼす要因について検討を行った。感謝の感情に関する研究は主に海外で行われ、本邦ではまだ萌芽期であり十分な知見が蓄積されておらず、感謝の感情とwell-beingとの関係については詳細な検討がなされていない。本論文において、well-beingを向上する要因として感謝の感情に着目し、介在要因の存在を仮定して検討を行ったことは、着想にすぐれ、且つ新規性・独創性が高く、今後の学問的発展性も期待できる。加えて、本論文においては、まず第2章において感謝の感情について先行研究結果と比較しながら基礎的知見を得た後に、第3章以降において本論文の主題に関わる検討を行っていることから、得られた知見に基づいて作成された本論文の論理性は高く、且つ得られた知見の学術レベルも高めるものとして評価できる。また、本論文は若年女性において感謝の感情がwell-beingを高めるメカニズムについて、男女間の違いを通して疫学的に検証した点は、着想、仮説を裏付けるための実証性として評価できる。さらに、well-beingの実現に寄与する可能性があるものとして「感謝の感情」を取り上げ、自己の内的要因やソーシャルサポートとも関連させて検討を加えた点は「人間発達環境学」という名にふさわしい学術的特徴といえる。

尚、参考論文として、以下の2編のレフェリー付論文が出版されており、博士学位申請（課程博士）の要件を満たしている。

- 1) Fujitani T et al. (2017) Association of social support with gratitude and sense of coherence in Japanese young women: a cross-sectional study. Psychol Res Behav Manag 10:195-200
- 2) Fujitani T et al. (2017) Gratitude predicts well-being mediated by social support and sense of coherence in women. Health Behav Policy Rev 4:562-569

よって、学位申請者の藤谷倫子氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。